
バカとテストと転校生！

ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと転校生！

【Nコード】

N3516Y

【作者名】

ゆき

【あらすじ】

風間 勇斗は『試験召喚システム』を取り入れた進学校、『文月学園』に興味を持ち 家族のこともいやになったので周囲の意見を無視して転校を果たす、疲れがたまっていたのか居眠りでFクラス入りを果たす。そこでかつての友達、観察処分者の吉井明久と学年2位の才女、姫路瑞希と再会し元神童、坂本雄二や帰国子女、島田美波 それに木下秀吉やFクラスのバカと関係を持つことになる

主人公紹介

オリキャラ紹介

風間 勇斗 17歳

身長 170cm 体重 60kg

特技 剣術 脱走術 料理 弓道

趣味 昼寝 悪巧み 料理 読書 裁縫おもにぬいぐるみとか

得意教科 物理 数学 英語 世界史 現国

苦手教科 日本史 保健体育

容姿 白髪短髪。体系は普通

おとなしそうな顔つきで、勉強や読書に勤しむときは眼鏡を掛ける。

異性にまったく興味がなく、そのため男のロマン（エロ本）にも興味はない。

好きな女性のタイプは特になし

本作の主人公で、明久、姫路とは小学校の頃の友達だが髪の色とか変わっているので現在2人はきざいでいない

小学4年生のときに親の都合で転校する

寒いところに転校することが多かったためか寒さにはめっぴう強いが暑さに弱い。

中学3年の頃から貯めた貯金と小説を書いて投稿してそれがヒットして売り上げにより文月学園へ転校する。

機械音痴で、料理用の電子機器と携帯いがいので使える電子機器はすくない

本来なら学年主席に居てもおかしくないほどの頭腦の持ち主だが、
気まぐれな性格と引つ越しの疲れがたまり居眠りをしてFクラスに
配属された

ちなみに前にいた学校では50点満点の平均は48点。

最初のころはクールなふりをしているが 本当は優しく気さくな
振る舞いをする、誰にでもそうというわけではなく、信頼を置いて
いる人物にはまた別の対応をする。

爺さん 父親、母親、の4人家族だが 一人で転校してきたため、
一人暮らし。

大きな屋敷で1人暮らし だが明久のマンションのとなりの部屋も
借りている

学力、策力、身体能力全てにおいて秀でているが、明久レベルの鈍
感がたまにあるかも

一人称はオレ。

自分が気に入らない物は容赦なく潰す。

基本的に自分から人を嫌悪することは少ない（格別迷惑な連中は別）
。

常に木製のくないと短剣それと木刀を携帯している

いじめ対策で武器を持ち歩いてみたところ不良を圧倒。

刀剣類を持てば右にでる奴はいないと称された。

危険人物扱いもされた。

一度見たものを決して忘れない完全記憶能力を持っているが秘密に
している、高校から大学までの内容は全教科1年の3学期に終了さ
せている

裏設定

怪盗の家系で呪いがある美術品を盗んだりする
人格がもう一つあり髪が紫色になる翼も生える
この街に来た理由はいろいろある

召喚獣

赤のジャケットとか黒のジーンズを着ている 黒い外套をたまに着
ていることもある
両手に短剣か大剣を持っている 弓もたまに持っている

腕輪の能力は剣や弓に雷、炎、氷結などの属性をつける（攻撃力が
1.5倍から3倍まで上げることができる）

もう一人の精神の方で召喚すると

怪盗の姿で翼が生えている

翼が武器

プロローグ（前書き）

読んでいただければ幸いです

プロローグ

「吉井、遅刻だぞ」

吉井明久。文月学園二年所属、この学園ではじめての「観察処分者」である（要するはバカである）吉井明久はドスの聞いた声に呼び止められる。声のした方には浅黒い肌に短髪のいかにもスポーツマンですみたいな人が立っていた。

文月学園補習担当の西村宗一こと鉄人（鉄人こと西村先生）である。

「あ、鉄じ————じゃなくて西村先生。おはようございます」

明久は軽く頭を下げて挨拶する。相手は生活指導の鬼だ。目をつけられたらろくなことになるのだ

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

やばかったな。危うく普通に「鉄人」と呼んでしまうところだった。鉄人っていうのは渾名だ。彼の趣味であるトライアスロンが原因である。真冬に半そでとかほかにも色々ありそうなんだけど

「それにしても普通に『おはようございます』じゃないだろうか」

「先生。先生は僕が挨拶せずに無視していたらどうするつもりでした？」

「補習室行きは確定だったな」

「だったら挨拶を重んじましょうよ」

「それとこれとは話が別だ」

「全くお前というやつは……遅刻の謝罪より先に挨拶の大切さを説くとは……いくら罰を与えても懲りないな」

「先生。僕、遅刻はあんまりしてないですよ？遅刻の常習犯みたいには言わないでください」

西村先生は去年明久のクラスの担任だったので明久が遅刻の常習犯でないことは知っている。

「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

鉄人が箱から封筒を取り出し明久に渡した。宛名の欄には『吉井明久』と書いてあった。明久は一応頭を下げて受け取る。

「あ、どーもです」

「全く。転校生もしっかり来てるんだから、しっかりしろ」

「転校生？」

明久が首をかしげる。

「それにしてもどうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに」

こうやって皆に一枚一枚丁寧に封筒に入れて渡さなくてもいいのに。

「普通はそうするんだけどな。まあ、ウチは世界的にも注目される最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環ってわけだ」

「ふーん。そういうモンですかね」

適当に相槌しながら明久は封筒に手をかける。

さてコイツはどのクラスに入るのか

この文月学園はクラスがA〜Fまでである。二年生以上はAから順に振り分け試験の成績順でクラスが決まっていくな。

頭いいやつはAだし、頭悪いやつはFだ。つまりは所属してるクラスで頭の良し悪しが丸分かり。だからコイツはFだけは避けたいんだ。

「吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

あの封筒って糊付け頑丈なんだよな……
苦戦してるぜ。明久のやつ……

「俺はお前を去年一年見て『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いてたんだ。」

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、更に『節穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ？」

明久は勉強しなかったけど振り分け試験は良く出来たとか言ってた気がする

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づいたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいですよ」

開かない……破ってあげよう……

明久はDかCだろうかと思っただか言ってた

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

明久。冥福を祈らせてもらおうか……………

『吉井明久……………Fクラス』

「お前は疑いようのない正真正銘のバカだ」

こうして俺たちの最低クラス生活が幕を開けた。

二年Fクラスの前。吉井明久は躊躇していた。

「遅刻なんてして、みんなの印象悪くなってないかな……？痛
い奴とか居たらどうしよう……」

「なんて考えすぎだよね！」

そういつてあいつは扉を開けて入って

「すみません。ちょっと遅れちゃいました」

愛嬌たつぷりに言っ……

「早く座れこのウジ虫野郎」

台無しにされた。

「聞こえないのか？ああ？」

それにしてもなんて物言いだろう。いくら教師でも失礼にもほどがある。

僕はにらみつけるように教壇に立っている教師を見た

その背は意外に高く、だいたい180cm強くらい。やや細身ではあるが華奢なわけではない。むしろボクサーのよう機能美を備えた細さを感じるぞこの教師

視線をもうちよっと上にやると現れたのは意志の強そうな野性味たつぷりの顔をした教師（教師以下略）。

短い髪の毛がつんつんと立っていてまるでたてがみのように見える（もうどうでもいい）。

「……………雄二、何やってんの？」

彼は明久の悪友、坂本雄二だ。教師じゃない。生徒だ。

「先生が遅れてるらしいから代わりに教壇に上がってみた。なんか転校生がこのクラスに来るらしいぞ。」

「あ、そういえば鉄人も転校生がどうか言ってた・・・」

『なにー！ー！？転校生だとおおおお！！！？』

『男か！？女か！？』

「残念ながら男だ」

坂本の死の宣告。

この一言でFクラスはずーんと沈んだよう。

「で、何で雄二が先生の代わりを？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

明久はこのとき『雄二さえ説得すればこのクラスは僕の思いどおりに……』とか考えてたらしい。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

考えることは皆同じなんだな

でもってFクラスの面々はみんな床に座っている。決まってるさ椅子がない

「それにしてもさすがはFクラス。ひどい設備だね」

とりあえずあいている席でも探そうとおもった時、

不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

そこには寝癖のついた髪によれよれのシャツを貧相に着た、いかにもさえない風体のオジサンが居た。

このクラスの担任だ。

「それと席についてもらえますか？HRホームルームを始めますので」

明久と雄二がそれぞれ返事をして席に着く。

先生は明久たちを待ってから壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします。」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。
チヨークすらまともでないみたいだな

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください」

「せんせー、座布団に綿が入ってないです」

「我慢してください」

「せんせー、卓袱台の足が折れました」

「ボンドで直してください」

「せんせー、窓が割れてて隙間風が寒いです」

「ビニール袋とセロハンをあげますから直してください」

………ひどすぎる。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、転校生からやつてもらいましょう」

『男だろ？どーでもいい……………』

『早く帰りたい』

めんどくさいなこんなクラスでやっていけるか

「では、風間勇斗くん、入ってきてください」

先生に呼ばれて、オレはFクラスの教室に入った

第巻話 バカとFクラスと自己紹介

「では、風間勇斗くん、入ってきてください」

先生に呼ばれて、オレはFクラスの教室に入ってしまった。

「風間勇斗くん。軽く自己紹介をしてください」

先生にそう促され、4人以外は聞いちゃいないだろうなと思ったけど一応自己紹介をした。

「えっと、風間勇斗といいます

趣味は料理と読書、剣術とかが得意かな。1年間よろしく願います」

さっと趣味と特技を言ったところでFクラスの面々が色々呟いている。

『けっこう可愛い顔してるな・・・』

可愛いかオレ母親にだと言われたことはあったがそういわれると不快だ

「うぜえこというと消すぞ」

そういつて殺気を出す

静かになった

その後

「しつもーん」

一人が手を上げてきた。

「頭はどのくらい悪いですかー？」

言いにくい質問だけどまあいいか

「振り分け試験の時は1つの教科以外寝ていたからほとんど0点に近い」

この文月学園のテストは変わっている。

問題数無制限で、時間内なら一度に何点でも取れる。

極端に言えば時間さえあれば1万点でも取れる

「だけど前に居た学校では上の中ぐらいだ」

今度は皆が吐血した。

「えっとそうということなんでよろしく」

ほんとに最低クラスなんだと思った

「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

先生に言われ廊下側の生徒が一人立ちあがり名前を告げる

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

しゃべり方がなんか違和感あるけど演劇部のなんかだろ。

男物の制服を着ているなんてだろう

次の人が自己紹介を始める。

「……………土屋康太」

「特技は盗sじゃなくて盗tなんでもありません」

なんかあやしいやつだな

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です」

と思って聞いてると女子の声だ。こんなむさい奴ばつかじゃなくて良かった。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

ドイツからの帰国子女？

「趣味は吉井明久を殴ることです」

なんちゅー危ない奴だ！

吉井明久と思われるさっきの遅刻してた奴が喚いている。
きつと去年もあんな感じだったんだろうな。

吉井明久 たしか引つ越しする前に仲良くなったバカの吉井って
けどいいかきずかれなくて

あとはもう名前を言うただけか。
つまらないな。

明久まで順番が回ったようだな。

あいつの自己紹介が終わったら確認しねえと。

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいな。」

「ダー——リン——イ——イ——ーン!!!!!!」

うわきもいキモ過ぎるよこのクラスあり得ないよ

「——失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

そのあとに教室に入ってきた

「あの、遅れて、すいま、せん………」
『え?』

クラスのほぼ全員が驚きの声を上げる。

そんな中、平然としてる数少ない人物、福原先生がその女子に話しかけた。

「丁度良かったです。今自己紹介をしてるところなので姫路さんもお願ひします」

「は、はい!あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします………」

「小柄な身体を更にちぢ込めるようにして声を上げる姫路さん。肌は新雪のように白く背中まで届く柔らかそうな髪は、優しい彼女の性格を表しているようだ。保護欲をかきたてる可憐な容姿は、男

だらけのFクラスで異彩を放っている」

「落ち着け吉井。心の中のナレーションが表に出てしまっているぞ。それから無表情でそういう個人的な解析をすると変態に見えるからやめろ。土屋。貴様はなぜカメラを用意している」

「・・・・・・・・・・・・・・・・写真を撮って売る」

「へえそうなんだ」

あとで消そう

それにしても姫路って頭良くなかった

「はいっ！質問です！」

既に自己紹介も終わってるどうでもいい男子A君が手を上げている。

「あ、は、はい。なんですか？」

「登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く姫路さん。その小動物的な仕草が可愛かったり」

「だから個人的な解析を口に出してするな。このバカ変態」

「なんだと！？僕のどこが変態なんだ！」

「全てだ」

「グハア！」

明久が吐血してくれた。まあ静かになっていいや。

既に自己紹介も終わってるどうでもいい男子A君が質問を以下略。

「なんでここにいますか？」

・・・・・・・・失礼な奴だな。

『確かにそうだ。姫路さんは学年次席に匹敵するんじゃないのか？』

『どついつことだ？』
『姫路さん結婚して』

だが姫路がなぜFクラスにいるのかはオレも気になった。
まさかオレじゃあるまいし居眠りなんて……………

「そ、その……………」

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……………」

ああ、納得。

確か振り分け試験は途中退席したら無得点扱いだったか。
0点じゃFクラス入りはむしろ必然とでも言うべきか。
またFクラスのバカどもが騒ぎ出す。

『そつえばオレも熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に会ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の嘘をありがとう』

「で、ではっ、一年間よろしくお願いします！」

姫路は明久と短髪の不良っぽい奴の隣の空いている席に着く。

「き、緊張しましたあ……………」

席に着くや否や、姫路は安堵の息をついて卓袱台に突っ伏す。

「あのさ、姫」「姫路」「

「は、はいっ。なんですか？えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしくな」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「ところで、姫路。体調はいまだに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

振り分け試験の時のことは詳しくは知らないが、さつき本人が高熱出したって言ってたし気になるものは気になる。

「よ、吉井くん!？」

さつきから明久がなんかショック受けてる。

「姫路。明久がブサイクですまん」

坂本雄二が言う

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ……」

そしてその一言でショックを受けてた明久が手放して喜ぶ。
なんて単純でバカなんだ……

「そっいえば確か明久に興味を持ってる奴がいたような……」

そんなのいるんだ。

「え？それって誰——」「そ、それって誰ですか!？」
「確か久保……」

久保のその次は？

「……利光だったか」

久保利光〓男

吉井明久〓男

結果〓BL

「……（明久が声を殺して泣く）」
明久って男にもてるんだ

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「心配するな、半分は冗談だ」

「え？残りの半分は？」

「ところで姫路、体調はもう大丈夫なのか？」

「あ、はい。もう大丈夫です」

「その君たち。少し静かにしてください」

と先生に注意されたところで、

バキバキガラガラ……

先生の教卓は無残にもゴミになってしまった。

さすがFクラス。酷すぎる。

「え、替えを用意してくるのでここで自習でもしてて下さい」といって先生も出て行ってしまおう。

ホントになにから何まで最低クラスなんだ……………

「雄二、ちよつといい？」

「ん？なんだ」

「ここじゃ話しにくいから廊下で」

「……………分かった」

そういうと二人は立ち上がって廊下に出て行った。

となりの席の秀吉に挨拶をする

「木下だったな」

「そうじゃが」

「よろしくな一つだけ質問があるけどいいか」

「なんじゃ」

「何でお前男子用の制服着ているんだ」

「お前もわしを女子としてみるのか」

えっなんでそんな反応なのだろう

「わしは男じゃ……………」

「それはすまん」

「まあわかってくれたらいいのじゃ」

第2話

バカテスト 化学

第1問

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。』

姫路瑞希と風間勇斗の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジエラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんと風間君は引っかかりませんでしたね

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・・・・・・未来合金（ すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

明久 s i d e

「それで、話つてなんだ？」

「この教室なんだけど・・・・・・・・」

「ああ、ひでえもんだな」

「何とかできないかな」

さすがにHR中だから人影はないし、これなら安心して雄二と話が出来る。

「教室の設備をなんとか・・・・・・・・ねえ・・・・・・・・」

「うん。こんな風に汚れてたんじゃ、勉強だつてままならないし、何よりみんなの身体に害が出る・・・・・・・・だから、もっといい設備を手に入れて、皆が安心して学園生活を遅れるように・・・・・・・・」

「つまりお前は体調の悪い姫路のために教室の設備をもっと良くしたいわけだ」

うぐうっ！さすがかつて“神童”と呼ばれただけのことはあるな！
勘だけはいい奴だ！

「恥ずかしいから遠まわしに言ってるのにストレートに言い直さないでよー！」

なんだかものすごい恥ずかしい。Fクラスの人たちに聞かれたら殺されそうだな（特に須川とか）。

Fクラスには女子といい感じになった男子（審問するやつら曰く異端者）を審問する（ただの逆恨み&妬み&八つ当たりなのだが）集団がある。

『異端審問会・FFF団』

Fクラスの須川亮をはじめ、Fクラスの男子（雄二&秀吉&風間以外）全員が所属している。明久もである。

もてない男が集まった逆恨み集団以外の何者でもない。
ちなみに同じ異端審問会に所属している男子でも審問されることがある。

たいていは理不尽な理由で殺さる……もとい、審問及び処刑される。

「いいだろう。どうせ俺も、やる気でいたんだからな」

「え………？」

「明久がやる気ならなおいい。俺も最初からやるうと思ってたんだからな」

「………雄二。なにを企んでるの？」

僕は雄二に疑いの目を向ける。

コイツは僕の幸せと幸福と笑顔を何よりも嫌っている。

コイツが何か企んでいるということは僕の死亡フラグが確立への一歩を踏み出すということだ。

「ちがうわ。バカ。俺はただ、世の中テストの点数や学力だけが全てじゃねえってことを証明してみたくなっただけなんだ」

「……ごめん雄二。疑って悪かったよ」

「気にするな明久」

「うん！やろう！」

『試験召喚戦争』を！！

この文月学園は『試験召喚システム』を取り入れている。

生徒は最後に受けたテストの点数にあわせた攻撃力を持つ召喚獣を教師承認の元、召喚して戦わせることが出来る。

このシステムを利用するのが試験召喚戦争である。

二つのクラスが召喚獣を用いて戦争をし、先にクラス代表を討ち取られたクラスが負けとなる。

勝ったクラスは相手のクラスの設備と自分のクラスの設備を交換出来る。

下位勢力が負けると設備がランクダウンする。

「そこで俺はクラス代表として提案する」

皆がごくりと息を飲み……………

「俺たちはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

『勝てる訳ないって』

『これ以上設備が酷くなるのは嫌だああ!!』

『姫路さんという天使エンジェルがいたら何も入らない』

みんなが喚きだす。

普通、最下位クラスのFクラスが最上位クラスであるAクラスに勝てる訳がないからだ。

「まあ皆落ち着け。勝算はある」

「……………?」「……………」

「例えば土屋康太!」

みんなの視線が彼に集まる。

「おい。ムツリーニ。いつまでも姫路のスカート覗いてないで早く前に来い」

「こいつがああムツリーニの寡黙なる性識者だ」

「……………!!」「……………」

「……………!!」(ぶんぶん)

もう否定しても遅いよ。ムツリーニ。

顔に畳の後が

「こいつがあのもツツリー二だと!?!」

「本当か!?!はじめて見た!」

「あいつ、畳に顔をつけてたあとを消そうとしてるぞ!?!確かにムツツリー二だの名に恥じないムツツリスケベだ!」

ムツツリーニムツツリスケベなだけなんだけど、これは結構有名な話。

勇斗 side

ムツツリー二ってなんだニツクネームか

ムツツリー二だからムツツリスケベとかまさかな

「コイツの保健体育の実力はAクラス以上のものだ。恐らく誰もかなわない。それから木下秀吉!」

へえそうなんだ木下の特技は何かな

「演劇で秀吉を上回るものはいない」

演劇かよまあ特技と言っではいいことだろう

坂本の説明に皆も納得している。

「木下秀吉って、確か演劇部のホープだろう」

「確かAクラスに双子の姉がいるって……」

「なら何かしらやってくれそうだ!」

「さらにこのクラスには姫路もいる。主戦力にして切り札だ」

みんなの視線が姫路さんを集まった

「姫路さんって実力は学年次席レベルなんだろう?」
「最強の切り札じゃないか!」

「当然、俺も全力を尽くす」

「それじゃあこのクラスにはAクラス並みの実力を持つ奴が2人もいるのか?」

この一言が火種で……

「勝てるんじゃないか!」

「ああ、いけるよ!」

「待っている!俺のシステムデスク!」

Fクラスは一気にヒートアップした。

「それにこの吉井明久もいる」

「?」

「だれだそれって?」

「コイツは学園はじまって以来、最初の『観察処分者』だ!」

え、えつと雑用係じゃなかったっけそれ

「あの、それってすごいんですか?」

スにも負けないからな」

「『『『『『なるほど』『』『』『』」

うるさいな

「という訳でバカ（あきひさ）にDクラスに宣戦布告に行ってもら
う」

「えーやだよ」

下位勢力の宣戦布告の使者はたいていボコされる。

「行かなきゃ俺がお前をボコす」

「行つてきます！！」

僕はダツシユでDクラスまで宣戦布告に行き、ボコボコにされて帰
つてきた。

その間に坂本はなにやらカッコいい台詞を吐きまくってたのである。

「全員筆を執れ！！出陣の準備だ！！」

『おおー！！！！！！！！』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！システムデスクだ！！」

『おおー！！！！！！！！！！』

HRが終わり

「木下も大変だな」

「秀吉で呼んでくれわしも勇斗と呼ぶから」

「ああ、分かった」

「それにしてもこのクラステンションが高い奴多い気がする」

「そうじゃな」

「秀吉って今日部活あるのか なかったら一緒に帰ろうと思う」

「きょうはないのじゃ」

そうか

「じゃあ行こうか」

そういって一緒に帰る

第参話

帰り道

歩いているなんとなく口に出してみた

「秀吉」

「なんじゃ勇斗」

「なんとなくだ」

「そうか」

なんか話す話題がないので本を出してみる

「勇斗何を出したんじゃ」

「ただの本だけだ」

「どんな名前なんじゃ」

「えっと〇〇???って名前の本だ」

「話題の大ヒット作の小説じゃな」

「その6巻だ」

「6巻じゃとたしか1部だけしか発行されていた幻の」

「そうだけだ」

「どうやって手に入れたのじゃ」

「内緒だ」

自分が作者だからって言えない

「秀吉この本欲しいのか」

「別にわしが欲しいわけではないが姉上が読みたいと言っておったのじゃ」

「だったら明日渡しに行くから伝えておいてくれ」

「わかったのじゃ」

そうして途中で別れる

Dクラス戦当日の朝。

本を渡しにいかんといけないな

オレ「昨日のこと秀吉の姉に話したか」

秀吉「うむ喜んでおったぞ」

オレ「そうか回復試験受けたら行くか」

Dクラス戦が始まる

明久side

「吉井！木下たちが渡り廊下でDクラスと交戦状態に入ったわ！」

Dクラスは新校舎の端、Fクラスは旧校舎。

この二つの教室間はかなり距離があるから、戦力も分散しやすい。それをねらっての時間稼ぎだった。

「何が足りないんだろうな……………」

こうしてみると、同じ部隊に配属された島田さんは、いわゆるモデル体型で、背も高いし、脚も綺麗なんだけど、どうしても何か物足りなさを感じてしまう。

「ああ、胸か……………」

と自問自答がポロっと口から出てしまう。

「アンタの指折るわ。小指から順番に全部綺麗にへし折るわ」

まずい。目が本気になってる。

「まあまあ島田さん。今は試召戦争に集中しようよ」

「……………まあ、そうね」

危なかった！！危うく僕の十本の指が揃いも揃って変な方向を向くところだった……………！！

「今戦況はどうなってるのかな……………」

「木下たち先攻部隊が頑張ってくれてるのよ」

そこへ、叫び声が聞こえてきた。

『戦死者は補習室へ集合ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

『て、鉄人！？鬼の補習は嫌だ！！』

『鉄人ではない！西村先生だ！』

『あんなのは補習じゃない！拷問だ！』

『助けてくれー！』

『これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という、模範的な生徒にしてやるから安心しろ！』

『『安心できねー！ー！ー！ー！』』

Dクラスの人が3人、Fクラスからも4人、補習室送りが出た。

だがおかげで雰囲気はなんとなく分かった。

この状況で僕らがするべきは、ただ一つ！

「島田さん。中堅部隊全員に通達」

「ん？何？作戦？なんて伝えるの？」

「総員退避！！」

「バカ！！！！」

島田さんに目を（チヨキで）殴られた。

普通そこはグーとかパーとかじゃないの！！？

「目があ！目がアア！！！」

「目を覚ますのよ！この意気地なしの甲斐性なし！」

目がアアアアアア！！！！！！

「アンタは部隊長でしょ！！臆病風に吹かれちゃだめでしょ！！！」

「さつきといつてることが真逆だよ!?!」

「私たちは十分頑張った。もうこれ以上は無理なのよ!?!」

まだ何もやってないけどね。

しかもなんか戻っちゃいけない気がする。

「そうだね。僕等には荷が重すぎた。撤退しよう」

「了解」

二人して臆病風に吹かれた。

そこへ、隠密（暗殺）担当のムツツリーニがやってきた。

「……………明久」

「どつたの？ムツツリーニ」

「……………雄二が、逃げずに戦ったら

これをやると」

「これは!?!?!」

ひ、秀吉の着替え写真!?!

「……………逃げたらこれを明久の家に

100枚送りつけるとも」

「こ、これは!?!?!」

て、鉄人の入浴写真!?!?

どうやって撮ったんだ!?!?この写真!?!

こんなの送りつけられたらたまったもんじゃない!

「全員突撃!?!?!?!?!?!?!?!」

「え!?!?撤退は!?!?」

- 2、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けた点数に比例した力を持つ。総合科目においては各科目最新の点数の和がこれに当たる。
- 3、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減点され、戦死に至ると0点となりその戦争を行っている間は補習室において補習を受講する義務を負う。
- 4、召喚獣は止めを刺されて戦死しない限りはテストを受けなおして点数を補充することで何度でも回復可能である。
- 5、相手が召喚獣を呼び出したにもかかわらず、召喚を行わなかった場合は戦闘放棄と見なし、戦死者同様に戦争終了まで補習を受ける。
- 6、召喚可能範囲は担当教師の半径10メートル程度（個人差アリ）
- 7、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。
- 8、戦争の勝敗はクラス代表の敗北を持つてのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストを用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

要約するとこんな感じ。

ちよくちよく改定されたりはするけど、この認識でいいはずだ。よく覚えておかないと、『テストを用いていれば、召喚獣なしでも

勝負が出来る』なんてことには気づかない。

「吉井！見て！」

島田さんの指差すほうを見る。

「五十嵐先生に布施先生！？Dクラスのやつ等、化学で勝負を挑んでくるつもりだな！？」

化学自身ないんだよな……………

「学年主任だと総合科目になって時間がかかるから立会人を増やして一気に来るつもりなのね！」

「島田さん、化学どれくらい！？」

「60点台が普通よ」

さすがFクラス。ひどいなあ。僕が言えることでもないんだけど。

「ならあそこは避けて学年主任の高橋先生のところに行くのがいいな」

「了解！」

で、僕等はこそそと隅へ移動する。

……………あまりほめられた光景じゃないような……………

「美波お姉さま！見つけましたわ！」

「げ、美春！！」

「しまった！布施先生が来る！」

ここで二人で戦ってたら点数を消費してしまう！

仕方ない！

「島田さんここは君に任せて僕は先に行く！」

「え！？普通逆でしょ！？」

「そんな台詞、僕は知らない！」

「えええ！？」

島田さんが快く(?)引き受けてくれた！
先を急ぐぞ！

「吉井！あとで殺してやる！」

なんか物騒なこと言ってる！

「仕方ないわね！勝負よ美春！」

「お姉さま！美春の愛の一撃、受け止めてください！！！」

Dクラスの清水さんと、島田さんの戦闘が始まる。

「「試^{サモン}獣召喚！！」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3516y/>

バカとテストと転校生！

2011年11月19日22時58分発行